

洛友会会報

京都大学電気系専攻内
洛友会
〒615-8510
京都市西京区京都大学桂
075-383-7014
www.rakuyukai.org

ささやかな交流

中国支部支部長 細田順弘 (昭40年卒)



中国地方は日本海側も瀬戸内海側も、岡山を除いては、平地がほとんどない。山から急に海へ落ちていく。したがって、坂の町が多い。

広島市は太田川のデルタで平地があるように見えるが、これは明治以降に延々と埋め立てられたものである。だからそういうところは、行政機能や工場、商業施設が主役となる。人口の増加に伴って住宅が必要となってくると、まずは海岸線沿いに、言いかえるとJRR沿いに、開発される。その後は山の

方に向かい、丘陵を切り開いて大規模な住宅団地が次々と開発された。このような丘陵地の団地のひとつに、私も住んでいる。この団地の中央に、広島市中心街とアジア競技大会の開会式や競技が行われたビッグアーチ競技場を結ぶ高速交通アストラムラインが開通したのは、競技会が開催される直前の、平成6年8月だった。私はそれ以来ずっとアストラムラインで通勤している。

私は7〜8年前から、朝の通勤時に徒歩を35分とりいれている。自宅から乗車駅までの下り坂を約10分間歩く。このときは、家内も運動のため一緒に歩くのだが、家内は帰りの登り坂を、さらに15分かけて歩いて帰ることになる。一方私は、電車の中で20分の読書時間を楽しみ、その後会社社に最も近い駅の二つ手前の駅で降りて、会社までの25分間を

歩いている。私はこれで3.5km歩くことになる。歩数に換算してたった4千歩ぐらいだから万歩にはとても及ばないが、やらないよりはましと思っ続けていく。

私の住んでいる団地は約30年前に開発され、いまはつぼつと世代交代が始まっている。当時家を建てたのは働き盛りの40歳台の人が多く、それら第一世代の人はいま60歳をだいぶ過ぎてしまっている。従ってその子供達はほとんどが就職し、親元を離れて生活する年代である。

その家を子供があと継ぎするのはまれで、むしろ年を取った第一世代の人が東京や大阪で暮らす子供と同居するために団地を出て行くケースが多い。そのあとにはそれまでの家を壊して新しく家を建て替えて、別の30歳代の若い第二世代が入居している。このような世代交代の進行により、最近ようやく、団地の住民に0歳児から80歳までの年齢がフルラインナップしつづつある。

この団地は中規模の団地で、600戸ぐらいある。ふだん団地の中のつきあいは町内会の同じ班の人が主で、大体30軒ぐらいである。ところが家内と二人で毎日一定の時間に団地を縦断して歩いてみると、いろんな人と行きかい、毎日会ううちに自然と挨拶や会話が交わされるようになる。

「おはよう。」と小学生の女の子に声をかけると、「おはようございます。」と大きな声が返ってきて丁寧

に頭を下げる。積極的な子は自分から先に挨拶することもある。「今日はおにいちちゃんどうしたの？一緒にじゃないの？」とさらに聞くと、「おにいちちゃんは忘れ物をして、家へとりに帰ったの。」という具合である。もちろんお互い名前も知らない。男の子の場合は、声をかけても口の中でモグモグと恥ずかしげに返事する子が多い。

最近では、通学時の児童の安全を守るために、第一世代とおぼしき人がボランティアで通学路の要所に立つっており、この人達にも挨拶を交わすこととなる。「毎日ご苦労様です。」

また、「おや、きょうは久しぶりにお目にかかりますね。」と家庭ゴミを出しながら声をかけてくる奥さん。「え、主人がしばらく出張してしまいましたので、今日は久しぶりにふたりで歩くんですよ。」と家内が答える。「でも奥さん、毎日よくがんばって歩いておられますね。」まあなんとかね。体重が減るとまではいきませんが、歩けるだけでも幸せですよ。」と歩きながらの会話が進行する。私はニコニコして聞いているだけ。別れ際には「気をつけていってらっしゃい。」と送ってくれる。

最近では花作りに精を出している家が多い。「このバラはつぎからつぎへと長い間よく咲くなあ。」とか、「花を年中切れ目なく上手に手入れして咲かすなあ。」とか、家内と話しながら歩いていると、それ

が聞こえたのか、その家の中から「おはようございます。奥さん、帰りに時間があれば寄っていただくさいな。お花のタネもあげますから。」と言われたりする。家内は、帰りにその家へ寄ってコーヒーをよばれ、朝っぱらから世間話をすることももある。

ところが会社に早出する用があつて、普段より30分ほど早めに家を出ると、当然ながら出会う顔ぶれはいつもとは全く違ってくる。

若いサラリーマンは下り坂を駆けるように急いでゆく。我々を追い抜くときも声をかけることはない。またこのころは、散歩をしている夫婦も多い。朝の通勤時間帯の散歩だから、もちろんご主人の方は現役を退いていると思われる。我々よりも一回りぐらい年長か、帽子をかぶり、トレーニンクウェア姿である。たぶん脚を鍛えるための散歩であろう、二人して一生懸命に歩いている。そのため散歩中の夫婦間の会話はあまりないように見受けられるが、挨拶を交わすときはさすがにキチンとしている。ただ足早なので長い会話は無い。

なんとすることも無い、知らない者同士の会話だが、成立すると楽しいものである。もちろんなかには、こちらから「おはようございます。」と声をかけても、黙って下を向いて通り過ぎる人もあるが、今は若い人たちのみならず老若男女みんなケータイやインターネットによ

る会話が盛んであるが、フェイスツ
ーフェイスで肉声による会話は、相
手の表情やしぐさも入って「情報量」
も多く濃やかになり、やはりコミュ
ニケーションの基本であると思う。
電気の「交流」は我々の生活に
欠かせないものであるが、このよ
うなささやかな「交流」も世の中
を明るくする。これからも大切に
してゆきたい。

教室だより

**ハイパフォーマンス
コンピューティング雑感**

島崎 眞昭 (昭41年卒)



この3月
末日に無事
京都大学を
定年退職し、
名誉教授と
名譽教授と

なりました。電子工学科を卒業して
から46年になります。最後の1年間
は教室選出の洛友会副会長を仰せ
つかりましたが、十分働けたかどう
か反省しているところです。

振り返ってみますと、昭和41年
に大学院に進学、昭和46年工学部
情報工学科助手に採用され、その
後情報工学科助教、大型計算機
センター助教、九州大学教授を
経て、平成9年に電気工学教室に
戻りました。この間、良き先生方
や同僚、後輩、学生に恵まれ今日
があると感謝しております。

研究面では、ハイパフォーマン
スコンピューティング(HPC)向
き科学技術計算アルゴリズムと関
連ソフトウェア、計算電磁気学の研
究と教育に従事してきました。こ
の間の計算機特にHPCシステム
の進歩には目覚しいものがあり、そ
の進歩とともに研究できたことは
幸運というべきで、特に京都大学
大型計算機センターに異動して、
京都大学での始めてのスーパーコ
ンピュータ導入に関与したことは
苦勞はあったものの印象的でした。

HPCならびに、有限要素法によ
る計算電磁気学の進歩や想い出に
ついては、それぞれの学会の研究会の
招待講演をする機会がありましたの
で、興味のある方にはそれぞれ文献
[1],[2]をご参照いただくと、こ
こではHPCのためのプログラム言
語について触れ、日米の違いなど
について述べることにします。198

0年代は日本のベクトル計算機の全
盛時代で、大型汎用計算機と共通の
ハードウェア技術が用いられ、HPC
で先端的な技術開発が行われ、そ
の結果が汎用機に還元されました。
汎用機を収益源とし、HPCが技術
開発を先導し、産業として栄えまし
た。一方米国のHPC専門ベンダー
はHPC市場の狭さに苦勞し、日米
貿易摩擦も発生しました。1990
年代になって、半導体技術について
ECL(Emitter-Coupled Logic)か
らCMOSへの決定的なシフトがあ
り、またPC(パーソナルコンピュ

ータ)、ワークステーションの進歩
とともに汎用機の全盛時代は終わり
ました。そしてPC、ワークステー
ション用の安価な多数のCPUをネ
ットワークで結合した分散記憶の超
並列計算機やPCCラスタがHPC
でのシェアを増大させていきました
(文献[3])。

「アルゴリズム+データ構造+プ
ログラム」というW.H.H.の著名な
プログラミンの教科書がありま
すが、分散記憶の並列計算機では(1)
データの各CPUへの分散(2)命令
のCPUへの分割とCPU間通信
をどのようにプログラムとして記
述するかの問題があります。それぞ
れの問題は計算量理論的には困難
な問題で、かつ二つの困難な問題が
関与するとアルゴリズム的には大
変困難な問題となります。実際の
プログラミンとしては

(I) H P F (High Performance
Fortran) に代表される並列処
理用高水準プログラム言語を
用いるか

(II) FortranまたはCのような既
存のプログラム言語とMPI
(Message Passing Interface)
に代表されるCPU間でのメ
ッセージ通信ライブラリとを
用いてプログラムを作成する
方法がありました。

MPIを用いる方法ではプログ
ラムがデータの分散から、命令の
分割、CPU間通信まですべてを
記述する必要があり、アセンブラ

的でプログラムの負担が大きすぎ
るといふ意見が多数で、1990

年代中頃以降米国を中心にHPF
の言語とその処理システムに関す
る大規模の研究開発プロジェクト
が実施され、またわが国では地球
シミュレータのプロジェクトの中
で独自の開発が行われました。わ

が国からの提案もHPFの仕様書
の中で、Approved Extensionとし
てHPF-JAが規定され、わが国
の核融合の分野では現在もHPF
普及の活動が続いています。米国
では大規模プロジェクトの実施に
もかわらず、2000年代にな
り、利用者のコミュニティのHPF
への興味が消滅し、現在応用
プログラムではHPFはほとんど
使われなくなり、もっぱらMPI
によるプログラム開発が行われて
います。ここで注目したいのは人

間のプログラム開発能力の高さで、
将来その仕組みが認知科学的また
は脳科学的な面から解明され、並
列プログラム言語処理系開発に生
かせないかと漠然と考えています。
さて、計算機のプログラム言語の
歴史に関しては米国の計算機科学
に関する学会ACM (Association
for Computing Machinery) にHO
PL (History of Programming
Languages) という不定期開催の会
議があり、第3回の会議が本年6
月9-10日に開催されました。筆
者は都合でこの会議には参加でき
ませんでした。HPFに直接的

に関係した論文として、

K. Kennedy, C. Koebel, H. Zima:
"The Rise and Fall of High
Performance Fortran: An
Historical Object Lesson," pp.717-
722.Proceedings HOPL, acm' 2007.

がありました。著者のKennedyは
筆者が1974-75年留学した
ニューヨーク大学クラーント研究
所の研究室の先輩でしたし、今年春
癌でなくなったところでもあり、ま
たもう一人の著者のH. Zimaとは並
列処理に関する国際学術誌Parallel
Computingの特集号を共同で編集し
たことなどもあり、この論文には特
別の関心がありました。ただし論文
の内容の紹介は本稿の目的ではない
ので詳細は述べませんが、ここで注
目したいのは米国ではプログラム言
語の歴史を記録し、その失敗も含め
た教訓を生かすために会議が開催さ
れているということです。また並列
処理用専用高水準プログラム言語HPF
の試みは米国では成功しません
でしたが、そこで断念するのではなく、
DARPA (Defence Advanced
Research Project Agency) のプロジ
ェクトHPCS (High Productivity
Computing System) では2つの新し
いプログラム言語開発(X10および
Chapel)の試みが行われていること
です。我が国でも当然ながらこのプ
ロジェクトの行方を注視しているた
けでなく、もっと積極的な関心、関与
が望まれるように感じています。

文献

- [1] 島崎 眞昭：HPC研究を振り返って、情報処理学会ハイパフォーマンスコンピューティング研究会、2006 HPC-108, pp.49-54, 2006年10月。
- [2] 島崎 眞昭、松尾 哲司、若下 武史、美船 健：有限要素磁界解析と大規模線形方程式の高速解法の進展、電気学会静止器、回転機合同研究会資料SA-06-75, RM-06-77, pp.95-100, 2006年8月。
- [3] Editors: G. R. Joubert, W. Rinsch, B. Hiramoto, L. Grandinetti, J. Kowalik, K. Miura, M. Shimasaki, D. Trystram: "Special Anniversary Issue," Parallel Computing Volume 25, Issue 13-14, December 1999.

電気系教室を去るにあたって

中村 行宏 (推薦会員)



今年3月31日まで、10年7ヶ月に渡って電気系教室に

勤めさせて頂きました。この間、諸先輩、諸先生方はじめ教室の皆様には多大なるご指導、ご支援を頂きましたことに心より感謝申し上げます。N T T研究所に勤務していた平成6年頃、田丸啓吉先生よりお声をかけて頂きました。私は数理工学科において学部、修士課程と榎木義一先生の下で統計的制御理論の研究に取組みましたので、当時、システム総合研究所の理事長をされていた榎木先生に相

談に伺いました。先生は「電気教室から言うてもうたか。それは光栄なことやな。ぜひお受けしなさい。」と喜んで下さいました。木村警根先生、田丸先生にN T T本社まで割愛願うにお願いして、平成8年9月、27年間勤めたN T Tを退職し、京都大学に着任致しました。こうして、学生として学んだ母校で、教官として教育・研究に携わることになりました。退任にあたり、これまでの学び、研究・教育について心に残っていることの一部を述べさせて頂きます。

1. 学生として
私を研究に導いて下さった、恩師榎木先生が講義や指導の合間に言われた言葉に、(1)「最適制御理論は、出発点から目標に向かって最適なパスがあると教えている。しかし、そのパスからズレたからといって決してがっかりすることはない。そのズレた地点から、目標に向かってまた最適なパスが存在するからである。」というものです。仕事や人生の最適パスからずれたとき、この恩師の言葉を思い出し頑張ったものです。もうひとつ披露しますと、皆様よくご存知のように、非線形特性を持った対象を最適制御するのは大変難しいのですが、榎木先生は、(2)「非線形は難しい、しかし奥が深く面白い。そして非線形の最たるものが人間である。だから人間が一番面白い。」と言って下さいました。どんな反応を示すか分からない難

しい上司にも少なからず出会いましたが、恩師のこの言葉を思い出して発想を変えて対処することができました。

2. N T T研究所において
昭和44年に電電公社の電気通信研究所に入社して、当時の超巨大企業、現在で言えば、インテルとマイクロソフトを合わせたより強大であったと思われるIBMに對抗して国産技術で世界一のコンピュータを研究開発するというD I P Sプロジェクトに配属されました。日本電気、日立、富士通という日本を代表する計算機メーカーとの共同研究でした。私は、主として、仮想記憶方式ならびにキャッシュメモリ方式採用の観点からC P Uの論理仕様に取組みました。当初希望した通信衛星の姿勢制御の担当にはなれなかったのですが、その後のわが国の計算機産業を支える多くの技術者を育てたD I P Sを担当できたことは、私にとつて大きな転機であり、今では、わが国の大型計算機の創成期の一翼を担ったのだと自負しています。

3. 京都大学において
京都大学では、集積システム講座情報回路方式研究室を担当させて頂きました。この研究室は、(1)プロセッサの高並列処理アーキテクチャ/方式構成、(2)その方式設計技術、を表裏一体の実現対象として研究・開発に取組んでいる。何故、この二つが表裏一体かと言うと、如何に優れたアーキテクチャであってもハードウェアとソフトウェアの統合体(システム)として設計でき、製造できなければ絵に描いた

ADシステム「PARTHENON (パルテノン)」を昭和60年に完成させました。これを用いて32ビットRISCプロセッサFDDP (Four-Day-Designed-Processor)を設計し、動作記述からのプロセッサ全体の自動論理合成による試作に世界で最初に成功しました。平成4年に青梅佐藤財団の支援によりパルテノン研究会を設立し、以後毎年、研究会、設計講習会、ASICデザインコンテストを開催しています。パルテノンは、全国の大学、高専で80システムが使用され、その研究・教育に大きな貢献をしています。この実績によってパルテノン研究会は、平成13年、特許庁から特許法第30条に基づく指定学術団体の認定を受け、また平成16年には特定非営利活動法人(NPO)として承認されました。

昭和56年、SFL PARTHENONの研究計画書を策定し、研究の必要性を訴えましたが、その審議において、研究所長から出た質問の一部をご披露します。最近はこのよう発想、厳しさはなくなりつつあるので、若い皆さんに伝え、足下を見詰めたおして頂く意味はあると思います。

餅であるからである。優れた設計力、設計文化を身につけることは、将来の電子システムを先導する研究者・技術者にとって必須である。」と訴えましたが、この意気に感じて志望してくれた学生諸君は、理論にも実践にも大変頑張る若者たちであり、私には、基本的に、N T T研究所の研究員に対するのと同じ接し方が可能でした。逆に、気が利かない点などは、学生だからと甘やかさないで叱りつけましたが、中村研究室の家風になりました。また、東京工業大学梶谷研究室より泉知論助手(現立命館大学准教授)、大阪大学白川研究室より尾上孝雄助教授(現大阪大学教授)、そしてその後任として広島市立大学より越智裕之助教授(現准教授)に来てもらい、また、課程博士一期生の筒井弘君(現大阪大学特任助教)には特任助手として私を支えてもらいました。

私は、高位設計技術をテーマとし、成果をP A R T H E N O N という論理合成ツールに結び付けましたが、若い先生方や学生たちは、各種通信情報システムの構成法により興味を示し、そのために設計ツールを活用したいという意欲を示しましたので、それを応援しました。みんなで21世紀を担うI C T高度化の核となる先進的なシステム構成技術、応用技術の実現に向け、以下のテーマを取上げ研究を進めました。

(1) リコンフィギュラブルシステム

ム・ハードウェア機能を書き換え可能な回路で実現することにより柔軟性と高速性の両立を狙う技術です。これを担当しているM 2 廣本正之君が情報処理学会より「D A シンポジウム2006優秀発表学生賞」を受賞し、またその応用の一つとして、機能書き換えにより様々な通信方式に対応する「ソフトウェア無線」について企業との共同研究に取組みました。

(2) 画像処理システム・高圧縮率と通信環境や端末の性能などに柔軟に対応できるスケラビリティを持つ画像符号化方式「PEG2000」は、映像分野のキラーアプリケーションと期待されているデジタルシネマの圧縮方式としても採用されているが、これについて企業との共同研究により、6400万画素、ノンタイリングの超高解像度に対応する符号化回路を世界に先駆け開発/発表しました。この成果は画像処理L S Iとして製品化されるに至っています。また、これを担当している筒井弘特任助手が電子通信情報学会平成17年度学術奨励賞を受賞しました。

さらに、計算機による画像認識技術を取上げ、車載やロボティクスへの応用を狙った画像認識アルゴリズムおよび専用プロセッサの研究開発に取組みました。核となる技術である、ステレオマッチング、トラッキング、セグメンテーションなどについて先導的手法を開発

し、3件の特許出願を行いました。

(3) 立体音響処理システム頭部伝達関数モデルをもとに、音声の遅延・回折等をデジタル信号処理によって再現し、低い演算量と高い臨場感を両立させる立体音響処理方式の研究に取組み、通常の2chステレオヘッドフォンにより、左右、上下、前後奥行きをリアルに感じさせる先導的三次元音響環境の実現に成功しました。

このような研究と並行に、システム設計のできる若者をもつと育てないと我が国はもたないとの危機感と、また親の脛かじりをしないで博士課程に進学できるように支援するため、大阪大学白川助教授(当時)に協力して榊シンセシスの設立に参画しました。阪大4名、京大1名(私)の教授とその研究室によるシステムL S Iの開発・設計を行う産学連携ベンチャーです。大学教員が技術指導し、大学院生が開発・設計の実務を担当します。現在では、大阪大学・京都大学・奈良先端科学技術大学院大学・兵庫県立大学・立命館大学の8研究グループとその関連研究室の教員、大学院生、卒業生が参画し、大きな成果を上げています。

研究については以上のとおりですが、次に講義について述べます。学部3年生に向けた「計算機システム」を担当致しましたが、これは光栄にも長尾真先生から引継がせて頂いたものです。また、修士

課程向けに、田丸先生から引継がせて頂いた「集積システム設計論」を担当し、後に、「応用集積システム」を立ち上げました。これらについても学生たちの反応に様々な思い出がありますが割愛し、この機会に現在の私が最もお伝えしたいことを述べて頂きます。

大学院の私の講義のひとつに、「電気電子工学基盤技術展望」があります。これは、平成16年から開講されたもので、電気・電子・情報工学を専門としない学生にも配慮して、オムニバス形式で複数の教官がそれぞれの専門分野の内容を分かり易く講義するというものです。私は「システムオンチップ(SOC)技術」を担当しました。その講義の中で、専門技術だけでなく、日本の精神文化に関する内容について、例えば、以下のように訴えました。

近江聖人と称えられた中江藤樹が33歳のときに著した「翁問答」の中で、「人が、金持ちを大切にするのは自分に恩恵があるからであり、妻や愛人を寵愛するのは自分の性欲を満足させるためであり、子を愛するのは自分の分身であるからにすぎない。しかし、そもそもこの身がなければ、お金も愛人も子も無用のものとなる。すべてはこの身あつての楽しみであり、この身を生んでくれた父母の恩なくしては現在の何もものない。したがって、まず父母を敬愛することからはじめ、その関係を妻、兄弟、友人へと広げてい

くことを孝と云い、そうすることが自然の摂理にしたがうことになるのである。」と説いています。

また吉田松陰が30才で処刑される前日、江戸小伝馬町の牢内において一日で書きあげた、弟子たちへ宛てた全文約五千字の遺書「留魂録」には、彼の短い人生を四季に例えた見事な死生観を諄諄と教え諭す言葉が述べられています。この冒頭に記されたのが、「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留置まし大和魂」という有名な辞世の歌です。そして肉親へ宛てた遺書の冒頭にこれも有名な辞世の歌「親思ふころにまさる親ごころけふの音づれ何とさくらん」を記していますが、自分の死の知らせを悲しむ親への思いに溢れています。

それから、広島、長崎に原爆を落とされた敗戦から半年後の昭和21年正月の歌会始における昭和天皇のお歌、「ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松そを、しき人もかくあれ」にも触れました。廃墟となつた国土から立上がってほしい、頑張ってほしいとの日本国民への深いこころが伝わってきます。そして天皇は、翌年昭和22年2月から足掛け9年をかけて全行程3万3千kmに及ぶ全国巡回をされる訳です。国民を励ますためですが、諸外国は、警備も手薄なこの時期に何と馬鹿なことをする、暗殺されても不思議ではないと高みの見物をしていたそうですが、赤旗を振

ついていた組合員まで陛下を見ると万歳を叫んだと伝わっています。戦争に敗れ、外国の軍隊に占領されている国の君主が、戦前と同じように、国民から尊敬され、心が通じ合っているこの状況は、過去の歴史からも、世界の常識からも到底考えられないことであり、正に奇跡だったのです。その後の歴史をみてもこのような例は皆無です。当時、ヒトラーは自殺し、ムッソリーニは民衆に虐殺され、イタリヤ国王は国外追放され、敗戦国でないベルギー国王も対独協力したということと王位を降りたという世界的情勢であったときです。

道元の歌「聞くままにまた心なき身にしあれば おのれなりけり 軒の玉水」には正に小我を取り去り、対象と一体化した心のあり方が述べられています。このような心境で研究に没頭したいものです。

岡潔先生より「人の知・情・意を向上するとは、情は浄化、自我の濁りをとることであり、知は顕現、働きを表し出すようにすることであり、意志は靈化、すなわち、生きよ」とする盲目的意志が常に善の方向を示すようになることである」と教わりました。更に、「このうち根本的なものは意志の靈化であって、これに恐ろしく長い時間がかかる。典型的な日本人は代々の実践によって意志靈化が非常によくできており、そのときその場における善の方向が直ちにわかる。こういう人た

ちを中核としなければ、光は闇と戦えないのである。」と学びました。以上述べたような先人の他にも、緒方洪庵、伊藤仁斎、貝原益軒、石田梅岩など、日本には、人としてのあり方・筋道を学べる誇るべき先輩がたくさんおられます。日本人のみならず、このような祖先の存在を知り、彼らのことばに一度でも接していれば、この国のあり方は変わるのではないかと、ここまで精神が荒廃することはないはずと思うのです。日常生活の中で、これら我々の宝ものをなぜ親から子へ、教師から生徒に教え、伝えないのか、と講義しました。

このような内容に対し、他専攻の学生を含め、教授室への訪問、メールなどによる多くの反応を得ました。私のどの講義より反響が大きかったです。賛否両論ありましたが、留学生を含め、確かに人として大事なことを教えて頂いた、気付かせて頂いた、と言ってくれる内容が多く、私が感動しました。

昨今のテレビなどみても、祖先への尊敬も日本人としての誇りも持たない売国奴のような連中が声高に公共放送を使って馬鹿なことを言っています。子どもたちに、我々の祖先にいかにか尊敬すべき人々がおられたのか、人として何をお大切にしようとしてきた国民なのか、何が我々の背骨なのか、事実を正しく教えなければならぬと思うものです。

4月1日からは立命館大学総合理工学研究機構教授として教職を継続するとともに、7月1日から、池田克夫先生の後任として京都高度技術研究所の所長・研究開発本部長を務めています。

最後になりましたが、洛友会の一層のご発展をお祈りするとともに、私を支えて頂いた研究室のスタッフ、学生の皆様にご心より御礼申し上げます。

定年退職にあたり

吉川 潔 (推薦会員)



この3月末をもちまして京都大学を定年退職致しました

た。定年あたり洛友会事務局から洛友会報7月号に定年の挨拶をご掲載いただけるとのご連絡をいただき、大変喜ばしく思っております。学生時代も含めまして実に45年間京都大学に御世話になり、特に電気系教室には35年間もの長い間ひとかたならぬお世話になりました。おかげさまで、この間、教育・研究におきまして実に充実した人生を送ることができ、これも、ひとえに、皆様方からいただきまし格別のご高配のお陰と厚く御礼申し上げます。

電気系教室とのつながりは、京

都大学院工学研究科原子核工学専攻博士課程を単位取得修了後、昭和47年1月原子エネルギー研究所に奉職し、粒子線工学研究部門 故服部嘉雄先生のもとで助手としてMHD発電の研究に従事して以来で、実に35年もの長きになります。

当時は原子力エネルギー利用の黎明期で、様々な先端的研究が世界的に行われていました。その中で、1000℃という高温ヘリウムガス生成を目的に高温ガス炉の研究が盛んで、その利用も含めて、世界的に非平衡電離MHD発電の研究が精力的に行われていました。その特徴は、電子がアルゴンやヘリウムなどの希ガスと衝突した場合、電子エネルギー損失が極めて少ないことを利用して、ガス温度は1000℃程度でも、電子温度をジュール熱で2,000〜3,000℃に保ち、電気導電率を熱平衡時より大幅に増加させてMHD発電機内部抵抗を小さくし、高性能、高効率発電を実現しようとする点です。

当時服部研究室には、高性能のプラズマトーチと強力な電磁石が設備されていました。また研究仲間、教務技官の故野暮之氏(元エネルギー理工学研究助手)、並びに田中大二郎氏(新居浜高専名誉教授)という大ベテランがおられ、この2人のおかげで実験や理論解析を大変迅速に遂行するこ

とができました。また、実験では大量のアルゴンガスを消費しましたが、その消耗品費などの研究費は故服部先生がすべて段取りされ、私は全く心配なしに好きなだけ研究をさせてもらうことができました。現在のように毎年1%程度削減される国からの運営費交付金(昔の校費相当)を考えますと、隔世の感がしますし、ほんとに助手時代が一番恵まれていたなとつくづく思います。

その後核融合における直接発電に大きな興味を持つに至り、特にミラー型核融合で発生する高エネルギー荷電粒子からの直接発電研究で当時世界の最先端の研究を行っていたカリフォルニア大学ローレンスリバモア研究所(LLNL: Lawrence Livermore Laboratory) 当時は「国立」の名前がなかったに、幸運にも、留学する機会に恵まれ、昭和53年10月家族共々、サンフランシスコから車で約1時間の乾燥地帯にあるリバモアに参りました。

思えば、当時研究室にはたくさんの方がおり、その指導も大変でしたのに、快く留学をお許しいただいた故服部先生始め研究室の皆様方のご寛容さには今更ながら大変ありがたく思っております。

LLNLは1マイル四方の広大な敷地にあり、元々は海軍基地で太平洋戦争後転用したものです。なぜ、こんな砂漠のような所にそれも海軍基地だったのかと大変興味

があつたわけですが、聞くところによりますと、真珠湾攻撃のあと、パークレーの隣のオークランドにある海軍基地への攻撃の可能性も排除できないという懸念から、基地の一部機能を内陸のリバモアバレーに移転させたそうです。そのため私が滞在した当時もかまぼこ兵舎を転用した建物が数多くありました。私の居室も時代がかった木造の建屋の1階でしたが、乾燥気候のためか建物の老朽化が遅く、火事さえ出さねばペンキを塗り、エアコンを設備するだけで結構快適な空間となっていました。

当時、リバモアは軍事研究を行っているセクションがあり、そこには私のような非米国籍の者は入れず、私の携帯しているレッドバッジとは異なるグリーンバッジの人だけが銃を持った守衛の厳重なチェックでゾーンへの入域を許可されていきました。私は、短期の外国人研究者も参加していた核融合エネルギープロジェクトに属していましたが、特にClassifiedされた所とは没交渉でその点は気楽でした。また、生活するに最低必要な給料を、それも連邦税免除の特典付き(日米の取り決め)で米国エネルギー省からいただいていたので、礼儀として、いつも給料日には米国旗に敬意を表しておりました。実際、私のように、働くのではなく、勉強に來たいわば、研究者もどき(?)にまで、このよ

うな機会を与えてくれたアメリカの懐の深さには心から感銘をうけました。その後ミラー型核融合研究が中止となった事実からして、リバモアでの核融合研究がもつとも盛んなよき時代にたまたま遭遇できたおかげと思っております。

研究所内の掲示板にはいろいろな紙が掲示されていましたが、時折Job Openingのポスターが掲載されていきました。しかしその中には、給料欄はOpenと記載されているものが数多くあり、これは正直大変な驚きでしたが、同時に経済性とは無縁(?)の軍事研究の特殊性を垣間見た気がしました。

洛友会会員皆様の中にはリバモアを訪問された方も多いと思いますが、約30年前のリバモアバレーは、現在のそこかしこに大規模な住宅街が建設されている状況とは全く異なり、わずかの草しか生えていない丘陵と灌漑システムを備えた大規模なブドウ畑(Wente Brothersが有名)に取り囲まれて、LLL研究所と小規模なリバモア市の住宅街があり、郊外は乾燥に強いクルミやオーク、ユーカリの木々が所々に茂っているさわやかな丘陵地帯で、野ウサギや野生の鹿がたくさんいました。LLLのHousing Officeの紹介で、外国出張中のLLLの研究者の家、それも“American Dream”といえるような1エーカー(1200坪)の家を借りることができまし

たのは大変幸運でした。庭には、イチゴ、サクランボ、ブドウ、イチジク、リンゴ、なし、等がたくさん植えられており、1年間の滞在の間、家族共々大いに果物を通して季節を堪能できましたことは大変楽しい思い出となりました。

留学前、諸先輩から、いろいろ留学の心得を教わりましたが、そのうち特に、「できるだけよき友人をたくさん作ること」という助言がありました。それを実行するため、ほぼ毎週金曜日の夜、同僚や、秘書さん、あるいは管理職の偉いさんなどをお招きし、すき焼きパーティを開くことにしました。当初近くにある一番大きいスーパーマーケットSafewayならすき焼き用肉はあるだろうと簡単に考えていたのですが、いざ行ってみると、照り焼き用肉はあっても、すき焼き用肉は皆目ありませんでした。サンフランシスコやパークレーにいけばあるにはあるのですが遠いですし、そこで、Safewayのブッチャーを指導(鼓舞?)して、すき焼き用肉を調製してもらうことにしました。

“リバモアはラボのおかげで世界的に知られている。そこにあるSafewayもより国際的になるべきである。すき焼きは日本の代表的な料理で、また国際的にも知られている。そこですき焼き用肉を作ってほしい。店頭で照り焼き用肉より、はるかに薄くLike Paperのようにしてほしい。”と頼み込んだ

わけです。そういうと、ブッチャーは“OK”といとも簡単に答えてくれましたが、翌日受け取りにいったところ、くちやくちやの、いわゆる日本という、そいだ肉の集まりという感じで、味はともかく、およそすき焼きを食べている感じはありませんでした。私も、どのようにしたら、あのように見事に紙のように薄くできるのか知りませんでしたので、”ともかく何でもトライしてがんばってください!”とい

いつつ、“前回よりmuch better”しながらも、鼓舞だけはし続けました。2ヶ月ほどの間は、お客さんにいいわけを言いながら、すき焼きもどきを召し上がっていたのですが、ある日電話で注文したら、やり方がわかったから今回ののは満足してもらえろ!”とえらく、興奮した声が電話の向こうから聞こえました。半信半疑で取りに行きましたところ、見事なすき焼き用肉が包んであり、”いったいどうしたのか?”と聞きましたら“Chilledしてからスライスした”とのことでした。以来、“Yoshikawa sukiyaki beef 5 pounds”と電話して、夕方Rib-eye steakのすき焼き用肉を取りに行くだけで日本と変わらない美味なすき焼きを、これまたおいしいリバモアワイン共々堪能でき、自分なりに、大いに国際貢献ができたのではと自負しております。実際、1年後リバモア

からパークレーに移る折り自宅で送別会を開きましたが、多くの方々に参加していただき、先輩からの助言は見事達成できたのではないかと思っております。現在も、その折の友人達とは交流がありますが、私どもにとつて彼らは大切な生涯の財産でもあります。

さて、昭和54年10月、パークレーの丘の上にあるローレンスパークレー研究所(LBL)に移り、主としてプラズマ加熱用中性粒子入射装置におけるビームダンプの研究をし、1年半の米国滞在を終えて昭和55年3月大学に戻りました。あちらに行く前はよくわからなかったのですが、大学に戻って初めてより具体的に彼我の特徴が見えてきました。

当然私が滞在したLLLやLBLといった研究一筋の研究所と学生の教育を含む大学(UCBや京都大学)での研究とは、本質的に比較することは無理ですが、あえて申せば、こと研究については、LLLやLBLでの1年間は大学の10年間に匹敵するなあ、というのがそのときの実感でした。これらの研究所では、管理、企画、運営、研究、研究支援の分業がきわめて整然となされており、それぞれが自分にもっとも適している分野で最大の活動ができるシステムとなっている、というのが大きな理由です。翻って、法人化後の京都大学に

において、大学人が、なによりもまず、より生き生きとした教育・研究活動を行えるようにするためには、(その結果として、自動的に高い評価となる)、従来の、「先生は立派(?)」だから、教育でも、研究でも、さらには管理運営でも、すべて百点満点でこなせるはずだ(!!)」という、誤解(妄想)をさっぱり捨て去り、教員自身ももっとも適しているという分野を担当し、そこで最大の能力を発揮することが重要ではないかと思えます。その際、貢献する分野間での流動性も担保しつつ、給与体系や、昇任基準など、きめ細かく配慮して、教員が十分に貢献すれば、十分に評価され、十分な待遇も得られる、というシステムにすることが必須ではないかと考えています。これは事務方にも同じことが言えます。(もっとも、これはすでに企業で行っておられることと思えますが。)

以上、留学時代のとりとめもないお話になりましたが、最後に締めくくりにあたり、故服部先生が還暦を迎えられた年に大きな病を得られ大量の輸血用血液が必要になりました時、電気系教室の皆様方が全力を挙げてその確保に筆舌に尽くせぬご尽力を賜りましたことは終生忘れることのない出来事です。当時の部門助教としてこの場をお借りしまして改めて厚く御礼申し上げます。

私事ですが、この四月からは、

新設されました京都大学研究企画支援室(日本イタリア京都会館2階)に勤務し、さまざまな研究企画のお手伝いを始めております。本部の近くですので是非ともお立ち寄りください。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。長い間誠にありがとうございました。

平成19年6月20日

上之園親佐先生を偲んで

上田 暁亮 (昭34年卒)

本学名誉教授上之園親佐先生は、平成19年3月14日に、享年89歳でご永眠なさいました。先生のご逝去を悼み、謹んで追悼の辞を述べさせていただきます。

先生は大正8年3月27日、鹿児島県川辺郡川辺町でお生まれになりました。鹿児島県立川辺中学校、佐賀高等学校理科甲類を経て、京都帝国大学工学部電気工学科を昭和18年9月にご卒業なさいました。同年10月のご卒業と同時に満州電業株式会社に入社され、電力機器の試験業務に従事される傍ら、大連工業学校講師を兼任なさいました。昭和20年8月に臨時召集により現地で応召され、敗戦と同時に会社は解体され、北朝鮮にて捕虜の経験をなさっておられます。昭和21年10月に佐世保港に復員、帰還され、翌年7月商工省東京商工局に勤務、昭和22年12月日本発送電株式会社へ入社され電力技術研

究所に勤務なさいました。昭和26年5月の電力再編成に伴う日本発送電株式会社の解体により関西電力株式会社人事部付け、財団法人電力技術研究所へ出向され、同研究所が昭和27年11月に(財)電力中央研究所と改称されました。

電力中央研究所の創立時期は、日本の電力需要が10%以上の高度成長が続いており、電力設備の増強は間に合わず、在来設備の老朽化に拍車がかかり、事故が頻発しておりました。そこで、極力事故を防止し、事故原因を究明することが研究所の緊急課題でした。研究者・研究予算の極めて厳しい状況の中で上之園先生の取り組みられた課題は水力発電機の事故原因究明、すなわち発電機の耐雷対策・発電機巻線の絶縁設計と試験法の制定でした。

実験設備も整っていないかつた時代に、発電所の現場で、自ら陣頭指揮を執りながら、発電機内部の電磁現象を、稼働中の発電機を対象に実測を繰り返し行われ、現象そのものの実態を解明することによって対策法を樹立なさいました。そのために模擬的な雷を発生させるインパルス発生器を、有り合わせの設備を利用し、私たちが教養部の物理実験で習った基礎的な原理などを徹底的に活用され創意あふれた工夫を凝らして装置を製作され、東京・東北電力株式会社管内の、あちらこちらの水力発電所で2・3日間にわたり不眠不休で繰

り返して実験なさいました。現在では暴挙と非難されるであろうこれらの一連の実験は、日本初のみならず世界初の発電機の特種な運転を現場で行った実証試験でした。

これら一連の実験を肌身で会得された主な結果は、発電機のサイジンピーダンスの測定、ならびに雷サージが発電機巻線の出力側に雷のコイルで受止められ、過渡的に異常な高電圧がかかり絶縁が破壊されることを突き止められたことや、発電機巻線の温度特性と劣化特性の解明でした。当時は、これらの諸問題に対するデータは極めて少く、殆ど在りませんでした。このような電力機器および絶縁物の特性に関する先生のご温蓄は、その後、雷の被害と対策(絶縁)に関する技術分野の諸規格に反映され、超々高電圧(50万ボルト)送電システムの基盤技術の確立、安定した電気エネルギー供給システムの構築へと発展を遂げました。

先生の信念は「実験を行ない現象を把握する(実態を見極める)。実測結果をもとに理論的解明と即座に対症療法を案出し実行する。それらの中で成功したものに對して理屈は後から追って行く。」と要約されます。こゝまでは、主として技術的な側面を述べましたがこのような大規模な、しかも社会的に大きな影響のある仕事を成し遂げられたのは、先生が偉大な指導者、良き管

理者であつたが故のことに疑いの余地はありません。現場実験で先生の指揮に従った部下の方々の先生に対する信頼と尊敬の気持ちは大変大きかったと伺っております。これは、大学で先生から直接ご薫陶を賜った私たちが共有している先生の暖かい包容力のある人間性によっても裏づけられます。

先生はまた、当時先生の上司であられた電力の鬼と呼ばれている歴史上の人物松永安左エ門(当時、電力中央研究所)理事長の信任が最も厚かつた方のお一人でした。理事長は頻繁に上之園先生を呼び意見を求められたと伺っています。そのとき、上之園先生が短刀直入にご説明され、理事長がお気付きでないことを指摘され納得されますと、理事長は立ち上がり有難うと頭を下げられ握手を求められたと伺っています。

先生は、昭和31年6月に、一連の成果をまとめられ博士学位論文「発電機衝撃電圧試験に関する研究」を提出して工学博士の学位(京都大学)を授与されていらつしゃいます。私たちが学生だった頃、林重憲先生から過渡現象の講義で習った教科書「演算子法解説(電気書院、昭和29年)」第3章3・6節に、定電流回路を利用する過渡インピーダンスの実測―第一京大法―が記述されていますが、これは上之園先生が正に現場で実験を行ないデータを解析しておられたときに、先生がご自身で

命名された方法そのものであることを記させて頂きます。

先生は昭和42年1月に母校電気工学第二学科の電力系統工学講座担任教授として迎えられ、電力工学分野の教育、研究に携われ、発電機の脱調現象(脱調時に発電機内部に生じている電磁現象)、送電系統の雷害事故低減法と対策、ならびに電力系統の安定運用等に関する研究を指導され電力工学分野において現在指導的な立場で活躍中の多くの人材を輩出なさいました。

先生は、昭和53年4月、他の講座に所属していた筆者を上之園研究室の教官の一人に加えて下さいました。筆者の先生に対する最初の印象は、威厳を保たれた近づき

難い感じを抱えておりました。しかし、直接先生に接してご指導を受けるにつれ、先生のご見識は高く、度量は大きく、物事の実態(真贋の程)を素早く読み取られる卓越した能力をお持ちで、かつ人間としての暖かい思い遣りのお心を兼ね備えられている指導者でいらつしやることを実感し、尊敬の念が膨らんで参りました。先生は実験を伴う実学を偏重されているように誤解されている面は否定できませんが、それは外から見えない部分で、先生は本来在るべき姿の基礎研究を大切にされる強い志と夢を秘めておられました。筆者のみならず、先生からご薫陶をうけた門下生一同(学外の方

も含む)は学術、技術は言うまでもなく先生に巡り合うことができただことよって、人生が明るく広く豊かになりましたことを実感し深くお慕いし感謝しております。

筆者は先生にお話を伺った後は、何時も清々しい気持ちになりましたことが、昨日のことのように思い出されます。先生のお教えを真似ることにより、その後の人生が上向き志向になったことは事実でしたが、残念ながら器の大きさが異なるため真似ることができずに残念な思いをしたことも少なくありません。

筆者がお世話になった当時、研究室には既に模擬電力系統の実験設備が備わっており、発電機の脱調現象を直接実測することができました。この当時でも、現在でも、電力会社で実系統を運用なさっておられる現場でも、世界中で、脱調現象そのものを見ることが出来る実験設備の在るところは非常に少ないのが現実です。先生が、大学の一講座内にこのような設備を導入されたのは、現象そのものに直接触れることが科学、技術者を育てる第一歩であるとの哲学を実践されたことの証だったと考えております。

先生は京都大学ご在職中、学内では学生部委員会委員、京都大学技術顧問、ヘリオトロン核融合研究センター、工学部付属イオン工学実験施設、大型計算機センター協議委員会、京都大学評議員、な

どの要職を併任、兼任なさいました。先生はこれらの委員会では大所高所から現実を直視した正統な数々のご発言をなさり、健全な大学運営に大変ご尽力なさいました。

中でも電気系教室にとりまして特筆すべきことは、大学紛争の際に電気系教室が危機に陥ったとき、先生が交渉に臨まれ収拾されましたことは、事情を知る方々の間では上之園先生は電気系教室の救世主だったとの伝説になっております。筆者は事の詳細は部分的にしか存じませんが、推し量りますに、実態分析の深さと物事の真髓の把握、相手の立場をも理解されての本来在るべき姿の実現可能な妥協案の提案と説得、人間としての度量の大きさと暖かい心が相手に伝わった結果と察しております。

また、学外では文部省大学局科

学官、電気学会では同期機標準特別委員会や絶縁試験法標準特別委員会の委員長、日本工業標準調査会臨時委員、日本学術振興会流動研究会副会長および会長、日米科学技術協力事業核融合分野研究計画委員、文部省学術審議会核融合特定研究専門委員会などの委員、日本学術会議会員(第5部)、通産省資源エネルギー庁大都市電気供給施設検討委員会委員長などの要職を務められました。これら学外での活躍を通して、京都大学に多

くのセンターや施設が多大な恩恵を受けましたことは先生の大変なご尽力の賜物でした。先生は京都大学のみならず、将来のわが国の科学技術の在り方にも腐心され数々の有益な提言をなさってこれら大きなご功績を残されました。

先生は昭和57年4月に京都大学を停年退官され、同時に京都大学名誉教授の称号を授与されていらつしやいます。その後は、関西電力株式会社顧問、(財)電力中央研究所顧問、ならびに摂南大学客員教授などを務められ、電力分野の発展に長年のご経験を継承されるべく後進の育成に務められる傍ら日本の科学技術の健全な発展に並々ならぬご尽力を果たされました。

先生はいろいろなご趣味をお持ちでしたが、中でもゴルフは特に好きで、良くコースを回られていらつしやいました。特に、研究室卒業生の同窓会でゴルフに興味を持つ人たちと、春と秋の年二回「上之園杯」と称するコンペを楽しんでこられました。このコンペは先生が体調を崩された後、現在も続いております。

先生は、今から約9年前になります、われわれ門下生が、先生の傘寿のお祝いをしようと計画をした頃に、体調を崩されご入院なさいました。その後、奥様やお嬢様をはじめお家族の手厚い介護が続いてまいりましたが、残念なこと

に、去る3月14日に肺炎により

ご永眠なさいました。先生のお誕生日が3月27日ですので、米寿目前のことで、まことに残念でした。先生がこの世に残されましたご業績はあまりにも偉大で要約する紙面もございませんが、過去を振り返り返らず、将来を見据えて先生は天国から「真の研究者、技術者を志す者よ、計算機に頼る事を否定はしないが、現実はそのほど生易しいものではない。身をもって実験を行い実態を把握することが大切なのだ!」とおっしゃっております。これは、貴重な警鐘であります。

上之園親佐先生、長年に亘っての暖かいご指導を下さいますと有難うございました。科学技術、特に、電力工学分野に捧げられました先生の情熱と、社会全般の行く末を見据えて数々のご提言に對しまして深甚なる敬意を表し、お別れのご挨拶に代えさせて頂きたいと存じます。先生のご冥福を心からお祈りいたします。どうか安らかに眠り下さい。

会員寄稿

一本の送電線

岩噌 弘三 (昭28年卒)

最近、ペルーのマチュピチュ遺跡の観光基地クスコ(海拔約3400メートル)から、海拔3890メートルのチチカカ湖まで、

観光バスで走った。羊、アルパカ、牛などが放牧されている広大な草原が長時間続くが、バスに沿って1本の裸電線が延々と続いた。電柱のトップにある碍子も少し大きく電力線用のものに思われた。

一体なにに使用されているのかと、その線を追い続けた結果、県境警備事務所のような所で終わっていた。ある程度予想していた通り、最終の電柱のところまで地面から立ち上がったきた線と共に柱上変圧器らしきもので終端していた。バスは停止せずに通過したために、残念ながら写真に収めることができなかった。

卒業後、弱電のみに従事してきたので、間違っているかもしれないが、両端で数オームの接地が可能で、消費電流も多くなければ、高圧で送電し受電端に自動電圧調節器を設置する方式が、数10kmに渡って、2本の送電線を引くよりは経済的かとも考えた。

昨年、開通後2ヶ月の、中国西寧からチベットのラサまでの列車に乗車した。標高4000メートル以上の区間が960kmに及ぶ荒涼たる土地で、トラブルが発生すればどうするのだろうと考えていると、乗客が携帯電話を取り出したのに驚いた。車窓の左側はかなり高圧の送電線が走り、規則的に無線中継局が設置されていた。右側には、駅ごとに、車両運行連絡用の衛星地上局が太陽電池と共に設

置されていて対照的であった。

北海道の四季

佐野 大輝
(平15年卒・北海道支部)

私が北海道に来て丸三年が経ちます。生まれも育ちも兵庫だった私が北海道に来たのは、きっかけは就職ですが、高校時代に行った修学旅行での感動が忘れられず、一生住むならここがいいと確信し、選択にはそれ程迷いがなかったのを覚えています。そして、現時点では私の選択は間違っていないかと感じています。

しかし、住んでみて初めて分かる、実感することが多くありました。今回はそんな小さな驚きと発見をご紹介させていただきたいと思います。

まず、4月に北海道に降り立った私は、まだ街中にも雪が多く残っていることに驚きました。残っているとしても、山の方だけだろうという私の想像は崩れ、覚悟を新たにしたので覚えています。4月初旬といえば、京都では桜が咲き、まさに春といふところから考えると、2ヶ月巻き戻した感じでしょうか？ちなみに、北海道で桜が咲くのは5月のゴールデンウィークのあたりです。

しかし、春を実感する5月以降は、自然溢れる北海道はアウトドアが好きな人にとっては、たまた

ない季節になります。私もキャンプ、ドライブなど休みの日は欠かさず外に出ています。見渡す限り一面の草原や川。山などを見るだけで、心豊かにさせてくれます。また、私は趣味で大学からテニスをやっており、こちらもコート使用料がびつくりするほど安く、またいたるところに、無料でだれでも使えるテニスコートがあります。

そして、私のイメージでは夏が終わると秋がやってきたかという間もなく冬になります。私は、3年間苦小牧にいて、今年の4月から旭川に転勤してきました。苦小牧は非常に雪の少ないところで(とはいっても北海道の中でですが)、ただ雪が少ない分、氷が張るため、車の運転や歩くことさえ非常に神経を使います。私が一番苦労したのは冬道を歩くことだといつても過言ではありません。しかし、旭川は雪が多いことで有名なので、それが今一番の不安です。

もちろん冬にも楽しみがあります。スキーやスノーボードが好きな人にはパウダースノーは最高だと思います。さらに、寒さ対策は万全で、蓄熱暖房機が24時間温度を一定に保ってくれるため、部屋の中は快適そのものです。そして、私の趣味のテニスは屋外でももちろんできないため、小学校などの体育館を借りて屋内で楽しめます。ただ、やったことがある人は分かると思いますが、つ

るつるのフローリングの上でテニスをする、球足の速さから、それはもはや別競技かと思うほどです。また、冬だけではありませんが、食べ物は何を食べても新鮮でおいしいです。魚介類はもちろん、アスパラ・ジャガイモ・とうきび・メロンは、私の味覚を変えたといつてもいいでしょう。そのおかげで、学生時代からは着実に太っていましたが、それには目をつぶっているところでは

かなり脱線してしまいました。長い冬を乗り越えて春夏を楽しむ、逆に言うならば、春夏を楽しむために、厳しい冬があるのではないかと思えます。

以上、簡単に四季の流れを記してみました(一部分脱線してしまいました)が、北海道は本当に素晴らしいところだと思います。まだまだ3年では周りきれていないところが多いので、これからも地道に走り回って、満喫したいと思っています。皆様も是非北海道へ来て下さい。

内からみた宇宙

問宮 馨

(昭和42年卒・東京支部副支部長)

宇宙にアコガれて、前田・木村研を選び、宇宙開発行政をやりたくて一九六九年科学技術庁に入った。宮仕えは、文部科学審議官を最後に二〇〇三年七月迄三十四年余だったが、その間、宇宙には三度

関与した。最初は、七一年から七九年迄の足かけ八年間である。前半は宇宙開発委員会の事務局として長期ビジョン作りに従事した。後半は、宇宙開発事業団の監督、七〇〇億円の予算要求、宇宙政策大綱の策定に従事した。

二度目は、八四年からの一年間である。この時は、開発に三〇〇億円が見込まれた国際宇宙ステーションの日本製実験モジュールの予備設計協定交渉をやらされた。

三度目は、九五年からの一年間、研究開発局担当の官房審議官時代である。この時は、日本のロケット(H-IIA)で商業衛星の打上げが出来よう法的枠組の整備に当たった。当時、米国の衛星を二十数機受注することに成功したが、後日H-IIが二機打上げに失敗し、解約されたのは残念であった。とはいえ、現在の打上げサービスの基礎を作ったのは確かである。

これで宇宙とはお別れかと思っていたが、〇三年に退官した後、宇宙開発事業団のお世話になることになった。その年の十月、宇宙科学研究所、航空宇宙技術研究所と一緒に独立行政法人「宇宙航空研究開発機構(JAXA)」が誕生し、その副理事長に任命された。

JAXAが発足して、一七〇〇人の役員が一七〇〇億円の予算で「よし頑張ろう」と奮い立った直後、環境観測衛星「みどりII」が打上げ後十ヶ月にして突然音信

途絶、次いで情報収集衛星を搭載したH-IIA六号機が打上げ失敗、さらに追い打ちをかけるように火星に向かっていた「のぞみ」が火星の軌道に入らず宇宙の藻屑となった。このトリプルパンチに新生JAXAは、まるでタイタニック号のように就航早々奈落の底へ沈んでしまった。

それからの一年間は、悪夢のようであった。三つのトラブルの一つ一つに対して、宇宙開発委員会、関係企業も巻き込んだ原因究明、再発防止対策、後続の衛星やロケットへの水平展開、宇宙技術全体の信頼性向上策の企画・実施、官庁・国会対応、責任問題等々想像を絶する毎日が続き、針の筵であった。その中であって、これを「禍」とせず、「福」と成すべく、性格の異なる三つの組織が共有出来る新たな目標の体制を構築しようと考えた。

そこで、全組織を挙げて〇四夏から〇五年三月末迄の八ヶ月の間に、二十年後の目標、それを達成するシナリオとロードマップを盛った長期ビジョンを作成した。公表前には、松本現京大副学長(四〇年卒)を含む外部諮問委員会の厳しい御指摘も頂いた。長期ビジョンを公表して予算要求をしたためか、ピーク時の二三〇〇億円から七年連続減少を続けていた予算が増加に転じた。併行して、世界最高レベルの信頼性を確保するための体制作りの検討も行

った。これについては、米、仏、独、日の宇宙機関のトップ経験者から成る委員会の助言を得た。その結果を受けて、システムズ・エンジニアリング部門を新設したが、そのトップには向井東京支部長(四一年卒)になって頂いている。このためか、この二年半でH-IIAロケットは六機連続で打上げに成功している。

この勢いを借りて、アジア・太平洋の国々をリードして、これらの国々のためになる活動を展開している。とくに長期ビジョンで示した災害管理システムをこの地域の関係機関と協力して実現すべく、小澤執行役(四六年卒)が中心となつて、十九ヶ国、八国際機関と合同プロジェクトチームを創設して推進している。今後、各国が持ち上がったっている小型衛星についても支援していきたいと考えている。

国際宇宙ステーションの建設作業も遅ればせながら着実に進んでいる。来年になると、我が国の実験棟「きぼう」もシャトルにより三回に分けて打ち上げられる。国際パートナーとの厳しい調整の結果、この三回の打上げに、土井、星出、若田がそれぞれ搭乗することになりホッとしている。

国際宇宙ステーションも一〇年に完成予定であるが、その後に来るのは「月」であろう。〇四年にプツシユ米大統領が発表した「火星に行くためにまず月で準備活動を行う」の声明がトリガーとなり、NASA

が動き始め、世界を巻き込んだうねりとなってきている。アポロ以降の空白を埋めるべく、JAXAは早くから月を徹底的に観測する大型探査機を月の周回軌道に送り込むSELNE計画を進めてきており、この夏に中、米、印に先駆けてH-IIAで打ち上げる予定である。

私の夢は、この十年位は、災害管理や環境監視等のシステムを整備して社会の役に立つ宇宙をやりながら、有人活動のための準備をして、十年後からは国の判断を仰ぎつつ、月面での有人活動を展開していくと言う長期ビジョンの世界を実現することである。

宇宙は、未知のフロンティア開拓を目指す極限への挑戦であり、一国の総合的な科学技術力を示す鏡である。米ソに比して極めて短期間に最小限の資金、人材、打上げ数で世界の最先端に躍り出たことを誇らしく思っている。ただ、宇宙はそのシステムの巨大さ故に理解され難く、活用され難い。そこで、より多くの国民の方に理解してもらおうべく、昨年から役員が全国各地に出向いて意見交換を行うタウンミーティングを始めた。筑波宇宙センター等の施設も一般公開しており、二月には東京支部の方々四十三名にも見て頂いた。また、より一層宇宙を活用してもらうために「宇宙オーブンラボ」等を通じて宇宙の敷居を低くする努力をしている。具体的には、宇

宙技術のスピンオフと一般技術の宇宙へのスピニングを進めている。ロケット表面に塗布する断熱材が地上の建築物に使われたり、汚水を一瞬で飲料水に変える装置が地方自治体の災害本部に導入されたり、新しいイノベーションを生み出している。今後一層努力を重ねて皆さまから愛される宇宙にしていきたいと考えている。洛友会の皆様のご支援をお願いしたい。

インド旅行記(中編)

岡崎 幸治
(平8年卒・九州支部)

私が29歳の時にインドへ一人旅に出た際のことについて、昨年の4月号の会報に前編という形で寄稿させて頂いた。今回はその続編という形で寄稿させて頂くものである。

前編と重複するが、その頃はまだ独身だったこともあり、年に1回、1週間くらいの休みがとれると、海外へ1人旅に行くのが常であった。そのときはパック旅行などを利用するのではなく、飛行機の往復チケットのみを購入し、宿泊は現地を探す。宿泊にはホテルは使わず、日本円で1泊100〜300円くらいの安宿に泊まったりして、ひと時のバックパッカー気分にするのが楽しかった。

社会人になってから何度かそのような旅に一年に一回程度出ていたが、その中でもインドが一番刺

激的で印象に残った。本稿では、その時の2日目からの行程を記す。初日に泊まっていたのは、インドの首都デリーの中の、メインバザール(別名バハールガンジー)という世界中のバックパッカーの間で有名な安宿街にある、「Ajay Guest House」という1泊170Rs(日本円で約300円)の安宿である。朝5時頃に、ヒンズー教の宗教音楽みたいな音で目覚めたので、インドの街をまず散歩してみようと思いい、宿を出た。1日目は深夜にインドに着き、宿が手配してくれた出迎えの車でつれられてきたため、迎りのようすがわからなかった。そのため恐る恐る通りに出てみた。その時の外務省のホームページで、メインバザール危険度1(十分注意が必要)と出ていたため、実はかなりビクビクしていた(過去に爆弾テロがあったらしい)。

通りに出てみると、日本ではありえない眺めが広がっていた。漠然と持っていたイメージよりも雑然としており、現実感が湧かない光景のように思えた。チャイ(ミルクを入れた紅茶のような飲み物。インドではどこでもおじさんが売りに歩いている)売りのおじさんが道端でにぎやかに独特の節回しで「チャイ、チャイチャイ、チャイ」と呼びかけており、道をいかににもインド人という感じのたくさんの方がにぎやかに歩いている。通りは本当にインドのバザ

ールという感じであり、しばらく歩くと、野良牛が道の真ん中を悠然と歩いていた。本で読んだりして予備知識があったが、インドでは本当に道の真ん中を、しかも首都の繁華街を堂々と歩いていた。こういう光景を見て、本当にインドに来てしまったのだという実感が湧いてきた。

少しうろついたら後、朝食を食べるために宿へ戻った。朝食は、パンが売られていたため、2つくらい食べ、更にチャイが売られていたため、ここで体験してみようとチャイを飲んでみた。砂糖を入れた普通の紅茶という感じであり、ちよつと拍子抜けだったが、今考えると欧米人の多い安宿なので、欧米人向けの味にあわせていたのかもしれない。

その後、インドでの旅の手配をしようとカウンターへ行った。この宿はツアーや電車のチケットの手配も頼むことができる。「地球の歩き方」で紹介され日本人向けにかなり売り込んでいる宿であり、宿の主人も日本語が達者なため、安心して旅の手配を頼むことができる。1週間程度しかない日程なので、電車のチケットの手配等は頼んで時間の節約を図ることにした。

デリーの他のインド内での行き先として、ガンジス川での沐浴で有名なベナレスと、ヨガの修行の聖地として知られるリシケーシユの2つを考えていたが、ベナレスがあまり治安がよくないのと穏やかな田舎でゆっくりするのがよいかと考え、リシケーシユへ電車で行くことで、電車のチケットの手配を頼んだ。また、タージマハルも見たいと思い、3日目をタージマハルのあるアーグラへ行く現地ツアーを頼み、4日目から7日目で、リシケーシユとその近くのハリドワールへ行く特急の往復のチケットを手配してもらった。

その後、改めて繁華街へ出て、その日はデリー市内を観光することにした。バザール内は人が増え、一層にぎやかになっていった。日本とは全然違う光景に気分が高揚してきつと歩いていくと、盛んに声がかかると。「Hello, Sir! Where are you going.」そして盛んにいい旅行社があるからと行こうと連れて行こうとするのだ。出発前に仕入れていた情報で、そのような旅行社に連れ込まれると、数人の男に囲まれ監禁され、法外な値段のツアーを申し込むまで出られなくなるかと手口を行うようなことを知っていた。一瞬にして恐怖を覚えるが、何とか振り切り、歩いていく。そのような観光客をだまそうとして声をかける輩は首都だけに次々に出現する。少し気分が悪いのが、私のような者に「G.D」と声をかけることだ。インドはイギリスの植民地だったので、イギリスの習慣が残っているのだろう。それらの男たちに次々と声をかけられるのを振り切りながら、歩いていくと、ニューデリー駅のある交差点に出た。多くのインド人が行き交っているが、皆信号を無視して交差点を渡っていつている。たくさん

の車が道路を通っていくので、よく事故が起きないものだと思心しながら、自分もインド人に習って交差点を渡って行った。交差点のところに、自転車の後ろに座席があり、自転車をこいで人を乗せていく、リキシャーの集団がいた。リキシャーも体験してみようと、声をかけてみる。料金交渉を行い値引きしてもらった上でリキシャーに乗ると、普段味わえない体験なので、なかなか気分がいい。

リキシャーでデリーの中心のコンノートプレスまで行き、降りしてもらった。コンノートプレスはいかにもイギリスの建築という感じの建物ばかりで、バザールと違いおしやれな雰囲気だだよっている。

しかし、ここも私を狙う男たちがいた。ショッピングセンターらしきところへ行こうとすると、「Hello, Sir」と言っ私の足元を指差してくる男がいる。その声につられて足元を見ると、なんと泥か大便かわからないようなものが私の靴についていた！そしてその男は私の靴を拭いてやろうと言ってくる。観光客から靴磨き代をせびろうとしてわざと靴を汚す、よくある手である。またしてもやられてしまった。ここでも、インドに来たんだと実感を強めた。

中篇なのに2日目の途中までしか行きつかなかったが、続きはまた続編を書かせて頂く機会があればペンをとりたいと思う。

同窓会だより

卒業五十周年記念クラス会

卒業当時、想像もつかなかった五十周年が巡ってきました。昭三二年電気卒の四七名(内同伴夫人十四名)は京都に集まりました。一日目は嵯峨野を散策し、竹の径、新緑、名園など京都の美しさを満喫の後「嵐山弁慶」で五十周年を喜びあいました。

記念会は学歌(九重に)斉唱で始まり、他界された十君の写真を掲げて追悼の黙祷の後、旧交を温める積る話に時を忘れました。

既に馴染みになっていく夫人グループのお喋りもかなり弾みが付いていました。

五十周年記念に制作配布した「学歌」「洛友会の歌」「琵琶湖周航の歌」「逍遙の歌」のCDに合わせ肩を組んで高唱し、松田先生の歌詞「今日なつかしきこの集い 青春の



日はよみがえる」を実感しました。二日目は蹴上から哲学の道、京大時計台が散策コースです。途中、住友有芳園で東山を借景とした近代庭園の粋、泉屋博古館では古代中国文化の凄さに触れ、法然院ではここに眠られる恩師大久保先生の墓前に写真を掲げて在りし日の先生を偲びました。

大学では、嬉しくも保存されている赤レンガ門に五十年前の記憶をよみがえらせ、かつては入り難かった時計台下に開かれたサロンでの歓談でもって楽しかった二日間を閉じました。(西台 悼 記)

本部だより

本部総会報告

平成19年度本部総会は6月10日(日)、東京の学士会館において、東京支部総会に引き続いて開催された。本部・支部会員80名の出席があった。

始めに長尾会長より、東京支部を始めとする各支部の努力によって会費納入率が向上に転じていること、18年度最大の事業であった名簿発行が無事終了したこと、今後さらに教室との関係を強化していく必要があることなどについて挨拶があった後、木村代表幹事の司会で議題の審議に移った。

表(1) 平成18年度収支決算報告書[一般会計]
(平成18年4月1日～平成19年3月31日)

Table with 4 columns: 科目, 予算額, 平成18年度決算額, 備考. Rows include 会費(学部), 預金利子, 広告掲載料, etc.

2. 支出の部 (単位 円)

Table with 4 columns: 科目, 予算額, 平成18年度決算額, 備考. Rows include 名簿編集費, 印刷費, 発送費, etc.

平成19年5月29日 領収書、帳簿など関係書類を慎重に監査し、収支決算書は適正であると認めます。

署名人 鈴木 実 ㊟

表(2) 平成18年度収支計算書 [特別会計]
(平成18年4月1日～平成19年3月31日)

Table with 4 columns: 科目, 予算額, 平成18年度決算額, 備考. Rows include 賛助会費, 預金利子, 雑収入, etc.

2. 支出の部 (単位 円)

Table with 4 columns: 科目, 予算額, 平成18年度決算額, 備考. Rows include (事業費) cue印刷費, (管理費) 事務委託費, etc.

平成19年5月29日 領収書、帳簿など関係書類を慎重に監査し、収支決算書は適正であると認めます。

署名人 鈴木 実 ㊟

表(3) 平成19年度収支予算 [一般会計]
(平成19年4月1日～平成20年3月31日)

Table with 4 columns: 科目, 予算額, 平成19年度決算額, 備考. Rows include 会費(学部), 預金利子, 広告掲載料, etc.

2. 支出の部 (単位 円)

Table with 4 columns: 科目, 予算額, 平成19年度決算額, 備考. Rows include 名簿編集費, 印刷費, 発送費, etc.

表(4) 平成19年度収支予算(案) [特別会計]
(平成19年4月1日～平成20年3月31日)

Table with 4 columns: 科目, 予算額, 平成19年度決算額, 備考. Rows include 賛助会費, 預金利子, 雑収入, etc.

2. 支出の部 (単位 円)

Table with 4 columns: 科目, 予算額, 平成19年度決算額, 備考. Rows include (事業費) cue印刷費, (管理費) 事務委託費, etc.

表(5) 役員の変更

Table listing board members: 会長 昭34 長尾 真(再), 副会長 昭41 鳥崎 眞昭(退・教室), etc.

(参考: 会則第7条「会長及び副会長は総会の議を経て選出する。」同条2「幹事は会長が委嘱する」 会則第12条「役員任期は2年とする。ただし重任を妨げない。」)

任期满了による役員の変更(会長、副会長)については、表(5)のように原案通り承認された。(今年度...)

平成18年度事業報告ならびに収支決算書(表(1)、(2))について事務局より説明があり、異議なく承認された。特に名簿の発行については、作業の概要や掲載内容など...)

払い込みが可能になったことなどが理由と考えられる、名簿発行の費用が予算の6割程度で済んだこと、などの説明があった。

その他の本部役員、各支部長はHPのトピックスをご覧ください。最後に学科長の佐藤亨教授より、教室の現況について報告があった。

洛友会会則（一部抜粋）

第4条 本会は前条の目的を達成するため次の事業、活動を行う。

1. 会報を作成し会員に配布する。
2. 名簿を作成し会員に配布する。
3. 総会を年1回開催する。
4. 会員相互の親睦と啓発のため、各種の会合を企画し、また会員による最新技術の紹介等を通じ情報共有を促進するとともに、関連研究室の教育研究活動を支援する。

5. 正会員は在学中の学生会員のために先輩として講演会や交流の場を設けるなど、適切な助言をする場を提供する。また教育研究活動や就職活動を積極的に支援する。学生会員は洛友会活動に参加し先輩との交流を活用するよう努力する。

6. 洛友会の特別会計（京都大学電気工学教室100周年記念事業基金）から、京都大学電気関係教室の情報誌“cue”の出版を助成する。

7. その他本会の目的を達成するために必要な事業を行う。

第5条 本会は次の正会員及び学生会員で組織する。

1. 正会員
 - 京都大学工学部電気工学科・電子工学科・電気工学第二学科卒業生
 - 京都大学大学院工学研究科電気工学専攻・電子工学専攻・電気工学第二専攻修士課程及び博士課程修了生

京都大学工学部電気電子工学科

卒業生

京都大学大学院工学研究科電気工学専攻・電子物性工学専攻・電子通信工学専攻修士課程及び博士課程修了生

京都大学大学院エネルギー科学研究科・情報学研究科の関連研究室修士課程及び博士課程修了生

京都大学大学院工学研究科電気工学専攻・電子工学専攻修士課程及び博士課程修了生

電気工学講習所卒業生
役員会で承認を得たもの（推薦会員）

2. 学生会員
京都大学工学部電気電子工学科の在学生

京都大学大学院エネルギー科学研究科・情報学研究科の関連研究室の在学生で正会員でないもの

第14条 正会員の会費は年額3,000円、学生会員の会費は年額1,000円とする。

第15条 本会の会計年度は4月1日に始まり3月31日に終わる。

第16条 本会の予算及び決算は総会において承認を得るものとする。

第17条 本会は地域別に支部を設けることができる。各支部の会則は本会則に準じて支部において作成する。

推薦会員

（平成19年2月3日承認）
山川 宏教授 生存圏研究所
（東大、平5年博）

・朝香卓也 准教授 通信情報システム専攻
（早大、平2年修）

・前野俊昭 講師 電気工学専攻
（東大、平8年博）

・酒井晃二 助教 高等教育研究開発推進センター
（岩手県立大、平16年博）

・尾関基行 助教 学術情報メディアセンター（筑波大、平17年博）

支部だより

九州支部総会報告

平成19年5月11日（金）、福岡市天神の福岡国際ホールにて、平成19年度九州支部総会を開催しました。本部から幹事の木村先生をお迎えし、九州支部からは主に福岡在住の会員24名が出席しました。

九州支部総会報告にあたり、まず本総会にて、九州支部長が、岡先輩（昭和35年卒）から深堀先輩（昭和44年卒）へ交替になったこと、また岡先輩が新たに支部顧問に就任されましたことをご報告致します。

さて、5月11日（金）当日はまず総会に先立ち、当支部恒例のカクテルパーティーを今年も催しました。このパーティーは、総会開始30分程前から三々五々集まった出席者が、グラスを片手に歓談するというのも盛り上がりがありました。

総会には岡支部長の挨拶で始まり、昨年度は予定通りに昼食会、懇親会を行い盛況だったことなどについて述べられました。

引き続き、本部幹事の木村先生からご挨拶をいただき、洛友会本部の動向についてお話を伺いました。

更に、木村先生からは、ご用意頂いたパワーポイントを用いて、洛友会の会費納入状況や改革の進捗、京都大学の現況などについてご紹介を頂きました。ご紹介の中で、電気・電子工学系の入試合格点などが学部で最低だったというお話などには驚きとショックの声も上がり、出席者からも近年の学生気質などについて盛んに質問が出るなど大いに盛り上がりました。



更に出席者の中で最年長の増岡先輩（昭和21年卒）から、九州電力の次期社長への就任が内定している眞部先輩（昭和43年卒）へ、祝福と激励の言葉が贈られました。眞部先輩の九州電力の社長内定については、懇親会でも出席者から様々な祝福の声がありました。

また、石井幹事、岡崎会計幹事から平成18年度活動実績、会計の報告及び平成19年度活動計画の説明を行い、満場一致で承認されました。

懇親会は、岩崎先輩（昭和22年卒）の乾杯の音頭で始まり、参加者全員酒を酌み交わしながら、終始和やかな雰囲気、昔話や近況報告などに花を咲かせました。

懇親会の中で、参加者全員にマイクを回し一言ずつお言葉を頂きましたが、皆様のお話からさまざまな仕事、趣味などに活動的に取



り組まれることが何えました。

楽しいひとときもあつという間に過ぎ、新たに支部顧問に就任した岡先輩(昭和35年卒)の音頭により懇親会を締めくくり、最後に全員で記念撮影をしてお開きとなりました。

(平成8年卒 岡崎幸治) 記

北海道支部総会報告

去る5月19日(土) 18時より札幌市内の札幌センチュリーロイヤルホテルにて平成19年度北海道支部総会を開催しました。当支部の支部総会は例年参加者が少ないのですが、今年は5名と例年にも増して少人数での開催となりました。

まず、中山支部長より挨拶ならびに最近の洛友会の状況に関し、会員数が微増したこと、会費納入者数も増加していることなど、役員会の内容を中心とした報告をいただきました。

続いて幹事からは前年度会計報告、今年度予算案をご説明し、承



認されました。

この後、中山支部長のご発声により、懇親会に移りました。例年のとおり、それぞれ近況を報告していただきながらの和やかな会となり、話題はペット、趣味(ゴルフ・庭いじりなど)、そして仕事の話など多岐にわたりました。

懇親会も予定の時間があつと言う間に過ぎ、最後は出席者の中で最も若い石川氏に締めの乾杯をしていただき、お開きとしました。

来年はより多くの方がご参加いただけることを、期待したいと思えます。また、北海道在住の方で、支部総会のご案内が届いていない方がいらつしやいましたら、お手数ですが幹事まで一報(kinotos@jcom.home.ne.jp)いただけると幸いです。

(平成元年卒 木元伸一) 記

中国支部総会報告

平成19年5月31日(木) 広島全日空ホテルにおいて第54回目となる平成19年度洛友会中国支部総会が開催されました。総会には本部から木村先生、教室から木本先生をお迎えし、中国地方各地から33名の会員のご参加をいただき、盛大な総会となりました。

総会は、開会にあたり細田支部長からご挨拶をいただき、引き続き支部事務局から支部会員異動状況、支部活動状況を報告、会計決算、予



算案、支部役員の改選案について説明、提案を行い、出席者全員の了承を得て各案が承認されました。

続いて木村先生から洛友会本部の近況について、また、木本先生から大学の近況について、それぞれお話しいただき、予定どおり全ての議事を終了しました。

総会終了後、記念撮影を行い、昭和30年卒業での秦先輩のご発声により支部恒例の懇親会を開始しました。支部会員の思い出話、近況報告等々、終始和やかな談笑の中で大いに懇親を深めながら会は進み、最後は、昭和31年卒業の井上先輩のご発声で支部懇親会をおひらきとしました。

(平成8年卒 岩見紀征) 記

四国支部総会報告

平成19年6月1日(金)、昨年

と同じく、高松市内の「全日空ホテルクレメント高松」において、第52回洛友会四国支部総会が開催されました。

本部から木村磐根名誉教授、教室から鈴木教授の御出席をいただき、四国内からは26名の会員が集まりました。

総会は、武智四国支部長(昭和40年卒)の挨拶で始まりまし

今年には暖冬で、四国地方は3月以降は記録的な少雨であり、梅雨前ではあるが渇水が心配される。

また、4月には地震もあり(震源愛媛県東予地方M5)、南海地震の予兆であるという学者もいる。

若い世代を中心にこれらの対応についても考える必要がある。とのお話がありました。

次に洛友会本部からお越しになった木村名誉教授から御挨拶をいただきました。

学生会員の創設などの洛友会の運営改革状況についてお話いただきとともに、教室と洛友会の関係、洛友会本部と支部の連係の必要性についてもお話をいただきました

鈴木教授からは、大学院の教育改革の状況や、桂キャンパスの大学院の状況について、設備・風景などを撮影した写真を、プロジェクトで非常に分かりやすく説明していただきました。



続いて、会務報告の後、富田先輩(昭和23年卒)の乾杯音頭に始まり、先生方や久しぶりの友人と酒を酌み交わしながらの歓談などしているうち、あつという間に予定の時間となり、最後には、恒例となりました「逍遙歌」と「琵琶湖周航の歌」の大合唱で懇親会を締めくくりました。

その後、有志一同は同ホテル21階のバーにて、高松の夜景を眺めながら深夜まで親交を深めました。

(平成10年卒 宮谷茂) 記

関西支部総会報告

平成19年度の関西支部総会は、6月3日(日)に、京都大学時計台記念館国際交流ホールにて、約30名の参加を得て開催されました。また、総会に先立ち、「最近の産学連携プ

ロジエクトに思うこと」と題して講演会を開催しました。講演会では、関西支部長で(財)京都高度技術研究所・産学連携事業本部長の市原達朗氏(昭和42年卒)より、価値観の多様化が進む今日、人類が環境・エネルギー・資源・人口問題でかつてない危機に直面している現状を踏まえ、日本の産業政策の課題、21世紀のあるべき企業文化、さらには大学の果たすべき役割について、示唆に富み熱のこもったお話をいただきました。後の懇親会でも、協業から共存・共栄への発想の転換などについて意見交換が盛んに行われ、有意義な講演会となりました。

総会では、市原支部長からの挨拶の後、議事として平成18年度事業報告ならびに決算報告、平成19年事業計画ならびに予算編成、平成19年度関西支部役員改選について審議され満場一致で承認されました。平成19年度の新役員は、
 支部長 田中宏毅(昭和43年卒)
 支部長 北井 茂(昭和44年卒)
 総務幹事 阿部正之(昭和53年卒)
 会計幹事 岩城吉信(昭和57年卒)
 の各氏です。

また、議事後、本部代表幹事



の木村先生より、本部が進められている洛友会改革の検討状況などについて、お話をいただきました。

支部総会終了後は、引き続き懇親会が開催されました。懇親会は、会長の長尾先生のご挨拶、音頭による乾杯で幕を開け、先生方や会員の方々が旧交を温め、あるいは新たな交友を楽しみながらの、にぎやかな歓談の場となりました。最後は、北井新副支部長のご挨拶に続き、関西支部恒例の「洛友会の歌」を全員で斉唱した後、田中新支部長の一本締めでお開きとなりました。

(昭和57年卒 吉川典雄) 記

北陸支部総会

平成十九年六月九日(土)富山市にある「松や」において、平成十九年度北陸支部総会を開催いたしました。本部から木村肇根先生、教室から萩原朋道先生をお迎えし、合

計十七名が出席して行いました。

今年度は支部総会に先立ち、萩原先生に「デジタル制御の最近の進展」と題し、講演をしていただきました。複雑な理論中心の内容ではありませんが、専門外の方でも理解しやすい構成で説明いただくとともに、講演後には出席者の質問に丁寧にご対応いただきました。

支部総会では、冒頭、中嶋支部長より今回で支部長を退任する旨の話があり、8年間支部長を務められた感想を述べられました。その中には、洛友会での交流は意義があることから続いているという言葉がございました。

引き続き木村先生よりご挨拶をいただき、本部の近況等についてお話がありました。近藤先生、長尾先生のご活躍の様子から、洛友会本部の改革の状況および本部総会での提案議題についてご説明いただきました。洛友会本部の改革



の中では、名簿の発行に関して、

広告掲載を中止したものの、管理システムの変更などによる経費の削減を図り、3年毎の発行を考えていること、会費納入に関しては、コンビニ納入が効果を上げていることをお話いただきました。

次に萩原先生より電気系教室の近況についてお話があり、桂キャンパスへの移転状況、吉田キャンパスでの耐震補強工事による影響および教員の異動状況のほか、卒業生の進路の状況についてご説明をいただきました。また、卒業生の進路の中で、博士課程へ進む学生が少数であることに鑑み、博士課程前後期連携教育プログラムの導入を検討していることをお話いただきました。

最後に、支部幹事のほうから支部近況報告、会計報告、支部役員改選に関する議案を説明し、満場一致で承認されました。

総会終了後の懇親会では、先生方や先輩・後輩、あるいは友人と酒を酌み交わして、旧交を温めることができました。最後に松本新支部長ご発声のもと、万歳で散会となりました。

(林記)

改選された支部役員

- 顧問 森本 芳夫(昭16)
 西村 尚和(昭23)
 野村 精二(昭24)
 (新) 中島 恭一(昭40)
 支部長(新) 松本 純也(昭44)
 副支部長 宮越 政通(昭41)

評議員 堀 英二(昭29)

- 金森 闊治(昭40)
 柴田 明(昭40院)
 西念 勉(昭46)
 安達 正利(昭46院)
 幹事 久和 進(昭47)
 野村 保之(昭52)
 (新) 松本 吉永(昭57)
 林 正則(平5)

東京支部総会・本部総会・講演会・懇親会報告

平成19年6月10(日)、神田錦町の学士会館にて東京支部の総会、講演会及び懇親会を開催しました。梅雨入りを思わせる長雨の中、当日の参加キャンセルが心配されましたが、今年度は本部総会併催のおかげか、結果的に総勢80名と近年にない賑わいとなりました。

支部総会は大矢総務幹事の司会により、午後2時に松本支部長による挨拶で始まりました。松本支部長からは、全学同窓会の東京支部発足のための準備会合が6月8日に開催されたこと、支部の課題であった会費納入率向上施策が奏功し会費納入会員数が72名も増加したこと、若年層活性化施策として若手勉強会の推進が決まったこと等の報告がありました。

続いて、大矢総務幹事より平成18年度行事・活動報告「第1号議案」があり、秋の講演会において会費未納者12名から新たに会費徴収でき



たこと、若手勉強会を四半期ごとに開催する方向で調整を進めていること、さらには支部会員名簿の整備が進み登録会員数が増加したこと等が報告され、承認されました。

次に、水本会計幹事より平成18年度決算報告および監査報告〔第2号議案〕があり、支部交付金(500円/人×749人)が新たに支給開始となったこと、及び昨年度に引き続き経費節減に努めたことから、3年連続で財政状態を維持できたとの説明がありました。この決算内容に対し、間宮監事からは適正との監査報告が行われ、決算報告および監査報告は無事承認となりました。

引き続き平成19年度の役員/評議員/幹事〔第3号議案〕の紹介が行われ、拍手をもって承認されました。平成19年度の新役員は、支部長 向井利典(S41卒)、副支部長 間宮馨(S42卒)、総務幹事 水本政宏(S63卒)、会計幹事 菅谷靖(H01卒)、庶務幹事 三木義則(S63卒)、監事 松田晃一(S43卒)の



6名となります。

ここで司会が水本新総務幹事に交代となり、向井新支部長の挨拶の後、平成19年度行事・活動計画〔第4号議案〕及び平成19年度予算計画〔第5号議案〕が説明され、いずれも拍手をもって承認されました。最後に、平成19年度に米寿・喜寿を迎えられた方々(米寿6名、喜寿11名)への祝辞が述べられるとともに、当日出席の喜寿 武藤良介様(S28卒)に会場より暖かい拍手が送られました。以上をもって、平成19年度洛友会東京支部総会は閉会となりました。

同日、同会場で午後3時15分より本部総会、また引き続き午後4時40分より東京支部主催の講演会が開催されました。

講演会では、講師としてお迎えしたイー・アクセス株式会社/イー・モバイル株式会社代表取締役会長兼CEOの千本倅生氏(S41卒)から、京都大学への期待、通信事業に掛ける想いなど、多岐にわたるたいへん興味深いプレゼンテーションを頂きました。質疑応答も活発なものとなる中、参加者一同による盛大な拍手で講演会は終了となりました。

午後6時からは恒例の懇親会に移りました。向井新支部長の挨拶の後、長尾本部会長の乾杯のご発声で始まった懇親会は、永安弘様(S16卒)を最高齢に、多士済済たる参加者の交流の場となりました。料理を囲んで会員の方々の談笑が広がるなか、水本新総務幹事を進行役として、趣味の会及び拡大クラス会の各幹事、喜寿の武藤良介様、最年少の石塚彰様(H19卒)と多数の方々からスピーチを頂きました。その後、菅谷新会計幹事の音頭により恒例の「琵琶湖就航の歌」を合唱し、最後に間宮新副支部長の中締めにより午後7時20分に散会となりました。

〔報告〕洛友会 東京支部 総務幹事 水本政宏(昭63年電II卒)

第87回関西支部ゴルフ競技会報告

第87回関西支部ゴルフ競技会が平成19年5月19日(土)武庫ノ台ゴルフコースにて開催されました。

当日は時折雨の降るあいにくの天気となったものの、アウトは松室氏(昭和33年卒)、インは伊藤氏



(昭和34年卒)の始球式でプレイを開始し、合計18名(内、シニア8名)が競技に汗を流されました。

(シニアの部)

- 優勝 松尾 茂(S38年卒)
- 2位 伊藤 俊一(S34年卒)
- 3位 森田 宏(S34年卒)

(一般の部)

- 優勝 金山 慎治(S41年卒)
- 2位 亀山 卓郎(S42年卒)
- 3位 小林 勝(S42年卒)

〔第88回競技会のご案内〕

平成19年10月20日(土)
於 武庫ノ台ゴルフコース
多数のご参加をお待ちしております。

〔連絡先〕

- 関西電力 大田 龍夫(S53年卒)
- 岡崎 俊範(H12年卒)

050・7104・0925

okazaki.toshinori@edkcpco.co.jp

編集後記

洛友会本部としてはこの数年で種々の改革と合理化を行い、新名簿も費用を節減して発行ができました。お陰様で経理的には本部会費か

ら各支部への予算の配分も可能となったことは洛友会全体の活動を活発化することに貢献でき喜ばしいことです。来年度からは新入学生を対象に学生会員も新設し、洛友会の先輩から在学生への多面的な支援活動も実施することになっていきます。会員諸氏のご協力をお願いします。会報の原稿についても、各支部に割り当てをお願いしています。そのほかに、できるだけ若い会員からの寄稿も歓迎いたします。これは若い会員の洛友会への関心を高めて頂くのにも貢献します。この紙面をお借りしてお願い致します。

今回東京支部総会と本部総会が合同で行われましたが、市原副会長にも東京支部総会にご出席いただきました。特に東京支部の学年をまたいだ活発な活動などは大いに参考になったとのご感想を頂きました。今後特に会員数の多い東京と関西の支部総会などに役員の相互出席を頂くことなども検討して頂いてはどうでしょうか。事務局(ik)記

訃報

- 昭4 濱崎章二郎 18・1・4
 - 昭9 松田 富彌 19・1・3
 - 昭17 己斐健三郎 19・3・6
 - 昭18 稲野藤三郎 19・6・18
 - 昭19 竹下 司 18・12・25
 - 昭19 大嶋 幸一 19・7・12
 - 昭29 杉本 守弘 19・5・7
- 以上の方々をご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。